

# 倫敦塔

夏目漱石



二年の留学中ただ一度ロンドンとう倫敦塔を見物した事がある。その後再び行こうと思つた日もあるがやめにした。人から誘われた事もあるがことわ断つた。一度で得た記憶を二返目へんめに打壊ぶちこわすのは惜しい、三たび目みに拭ぬぐい去るのはもつとも残念だ。「塔」の見物は一度に限ると思う。

行つたのは着後間まもないうちの事である。その頃は方角もよく分らんし、地理などは固もとより知らん。まるで御殿場ごてんばの兎うさぎが急に日本橋の真中まんなかへ抛ほうり出されたような心持ちであつた。表へ出れば人の波にさらわれるかと思ひ、家うちに帰れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕あさゆう安き心はなかつた。この響なべき、この群集の中に二年住んでいたら吾わが神経の纖維せんいもついには鍋なべの中の麩海苔ふのりのごとくべとべとになるだろうとマクス・ノルダ

ウの退化論を今さらのごとく大真理と思う折さえあつた。

しかも余は他の日本人のごとく紹介状を持つて世話になりに行く宛もなく、また在留の旧知としては無論ない身の上であるから、恐々ながら一枚の地図を案内として毎日見物のためもしくは用達のため出あるかねばならなかつた。無論汽車へは乗らない、馬車へも乗れない、滅多な交通機関を利用しようとするとはどこへ連れて行かれるか分らない。この広い倫敦を蜘蛛手十字に往来する汽車も馬車も電気鉄道も鋼条鉄道も余には何らの便宜をも与える事が出来なかつた。余はやむを得ないから四ツ角へ出るたびに地図を披いて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地図で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡査を探す、巡査でゆかぬ時はまたほかの人に尋ねる、何人でも合点の行く人に出逢うまでは捕えては聞き呼び掛けては

聞く。かくしてようやくわが指定の地に至るのである。

「塔」を見物したのはあたかもこの方法に依らねば外出の出来ぬ時代の事と思う。来るに來所なく去るに去所を知らずと云うと禪語めくが、余はどの路を通つて「塔」に着したかまたいかなる町を横ぎつて吾家に帰つたかいまだに判然しない。どう考えても思い出せぬ。ただ「塔」を見物しただけはたしかである。「塔」その物の光景は今でもありありと眼に浮べる事が出来る。前はと問われると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。ただ前を忘れ後を失したる中間が会釈もなく明るい。あたかも闇を裂く稲妻の眉に落つると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の焼点のようだ。

倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたものである。過去と云う怪しき物を蔽える戸帳が自ずと裂けて龕中の幽光を二十世

紀の上に反射するものは倫敦塔である。すべてを葬る時の流れが逆しまに戻つて古代の一片が現代に漂い来れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に取り残されたるは倫敦塔である。

この倫敦塔を塔橋の上からテムス河を隔てて眼の前に望んだとき、余は今の人かはた古えの人かと思うまで我を忘れて余念もなく眺め入つた。冬の初めとはいいいながら物静かな日である。空は灰汁桶を掻き交ぜたような色をして低く塔の上に垂れ懸つている。壁土を溶し込んだように見ゆるテムスの流れは波も立てず音もせず無理矢理に動いているかと思わるる。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼がいつまでも同じ所に停つているようである。伝馬の大きいのが二艘上つて来る。ただ一人の船頭が艫に立つ

て艦を漕ぐ、これもほとんど動かない。塔橋の欄干のあたりに  
は白き影がちらちらする、おおかたかもめ大方鷗であろう。見渡したところす  
べての物が静かである。物憂げに見える、眠っている、皆過去の  
感じである。そうしてその中に冷然と二十世紀を輕蔑するよう  
に立っているのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、い  
やしくも歴史の有らん限りは我のみはかくてあるべしと云わぬ  
ばかりに立っている。その偉大なるには今さらのように驚かれ  
た。この建築を俗に塔と称とこなえているが塔と云うは単に名前のみ  
で実は幾多の櫓いくた やぐらから成り立つ大きな地城である。並びそびゆる櫓  
には丸きもの角張りたるものいろいろの形状はあるが、いずれ  
も陰気な灰色をして前世紀の紀念きねんを永劫えいごうに伝えんと誓えるごと  
く見える。九段くだんの遊就館ゆうしゅうかんを石で造つて二三十並べてそうしてそ  
れを虫眼鏡むしめがねで覗いたらあるいはこの「塔」に似たものは出来上

りはしまいかと考えた。余はまだ眺<sup>なが</sup>めている。セピア色の水分をもつて飽和<sup>ほうわ</sup>したる空気の中にぼんやり立つて眺めている。二十世紀の倫敦がわが心の裏<sup>うち</sup>から次第に消え去ると同時に眼前の塔影<sup>まぼろし</sup>が幻のごとき過去の歴史を吾が脳裏<sup>のうり</sup>に描<sup>えが</sup>き出して来る。朝起きて啜<sup>すす</sup>る渋茶に立つ煙りの寝足<sup>ねた</sup>らぬ夢の尾を曳<sup>ひ</sup>くように感ぜらるる。しばらくすると向う岸から長い手を出して余を引張<sup>ひっぱ</sup>るか<sup>あや</sup>と怪しまれて来た。今まで佇立<sup>ちよりつ</sup>して身動きもしなかつた余は急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手はなおなお強く余を引く。余はたちまち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐいぐい牽<sup>ひ</sup>く。塔橋を渡つてからは一目散<sup>いちもくさん</sup>に塔門まで馳<sup>は</sup>せ着けた。見る間に三万坪に余る過去の一大磁石<sup>いちだいじしやく</sup>は現世<sup>げんせ</sup>に浮游<sup>ふゆう</sup>するこの小鉄屑<sup>しょうてつくず</sup>を吸収しおわつた。門<sup>かど</sup>を入れて振り返つたとき、憂<sup>うれい</sup>の国に行かんとするものはこの門を潜<sup>くぐ</sup>れ。



永劫の呵責に遭わんとするものはこの門をくぐれ。

迷惑の人と伍せんとするものはこの門をくぐれ。

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初愛は、われを作る。

我が前に物なしただ無窮あり我は無窮に忍ぶものなり。

この門を過ぎんとするものはいつさいの望を捨てよ。

という句がどこぞで刻んではないかと思つた。余はこの時すでに常態を失つている。

空濠からほりにかけてある石橋を渡つて行くと向うに一つの塔がある。

これは丸形まるがたの石造せきぞうで石油タンクの状をなしてあたかも巨人の門

柱のごとく左右に屹立きつりつしている。その中間を連ねている建物の

下を潜くぐつて向へ抜ける。中塔とはこの事である。少し行くと左

手に鐘塔しゆとうが峙そばたつ。真鉄まがねの盾たて、黒鉄くろがねの甲かぶとが野を蔽おほう秋の陽炎かげろうのご

とく見えて敵遠くより寄すると知れば塔上の鐘を鳴らす。星黒  
き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て、逃れ出ずる囚人の、逆しまに  
落す松明の影より闇に消ゆるときも塔上の鐘を鳴らす。心傲れ  
る市民の、君の政非なりとて蟻のごとく塔下に押し寄せて犇  
めき騒ぐときもまた塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必  
ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らす。祖  
来る時は祖を殺しても鳴らし、仏来る時は仏を殺しても鳴らし  
た。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何べんとなく鳴らした  
鐘は今いずこへ行つたものやら、余が頭をあげて蔦に古りたる  
櫓を見上げたときは寂然としてすでに百年の響を収めている。  
また少し行くと右手に逆賊門がある。門の上には聖タマス塔  
が聳えている。逆賊門とは名前からがすでに恐ろしい。古来か  
ら塔中に生きながら葬られたる幾千の罪人は皆舟からこの門ま

で護送されたのである。彼らが舟を捨ててひとたびこの門を通  
過するやいなや娑婆しやばの太陽は再び彼らを照らさなかつた。テ  
ムスは彼らにとつての三途さんずの川でこの門は冥府よみに通ずる入口で  
あつた。彼らは涙の浪なみに揺られてこの洞窟どうくつのごとく薄暗きア  
チの下まで漕こぎつけられる。口を開あけて鰭いなしを吸くう鯨くじらの待ち構え  
ている所まで来るやいなやキーと軋きしる音と共に厚樫あつがしの扉は彼ら  
と浮世うきよの光りとを長とこしえに隔へだてる。彼らはかくしてついに宿命しよくめいの  
鬼えじきの餌食えじきとなる。明日あす食あわれるか明後日あさつて食あわれるかあるいはま  
た十年とちの後に食あわれるか鬼おによりほかに知るものはない。この門  
に横付よこづけにつく舟ふねの中に坐ましている罪人つみびとの途中ちゆうちゆうの心こころはどんなであつ  
たろう。權かゐがししわる時とき、雫しずくが舟縁ふなべりに滴したたる時とき、漕こぐ人の手ての動  
く時ときごとに吾われが命いのちを刻きまるるように思おもつたであらう。白しろき髻ひげを  
胸むねまで垂たれて寛ゆるやかに黒くろの法衣ほうえを纏まとえる人ひとがよろめきながら舟

から上る。これは大僧正クランマーである。青き頭巾ずきんを眉深まぶかに被りかぶ空色の絹の下に鎖くさり帷子かたびらをつけた立派な男はワイアットであらう。これは会釈えしやくもなく舷ふなべりから飛び上る。はなやかな鳥の毛を帽さきに挿して黄金こがね作りの太刀たちの柄えに左の手を懸かけ、銀の留め金にて飾れる靴の爪先を、軽かろげに石段の上に移すのはローリーか。余は暗きアーチの下を覗のぞいて、向う側には石段を洗う波の光の見えるはせぬかと首を延ばした。水はない。逆賊門とチームス河とは堤防工事の竣功しゅんこう以来全く縁がなくなった。幾多いくたの罪人を呑み、幾多の護送船を吐き出した逆賊門は昔むかしの名残なごりにその裾すそを洗う笹波ささなみの音を聞く便りたよりを失った。ただ向う側に存する血塔けつとうの壁上おおいに大なる鉄環てつかんが下さがっているのみだ。昔しは舟の纜ともづなをこの環かんに繋つないだという。

左ひだりへ折れて血塔の門に入る。今は昔し薔薇しょうびの乱らんに目に余る

多くの人を幽閉したのはこの塔である。草のごとく人を薙ぎ、鶏のごとく人を潰し、乾鮭のごとく屍を積んだのはこの塔である。血塔と名をつけたのも無理はない。アーチの下に交番のような箱があつて、その側らに甲形の帽子をつけた兵隊が銃を突いて立っている。すこぶる真面目な顔をしているが、早く当番を済まして、例の酒舗で一杯傾けて、一件にからかつて遊びたいという人相である。塔の壁は不規則な石を畳み上げて厚く造つてあるから表面は決して滑ではない。所々に蔦がからんでいる。高い所に窓が見える。建物の大きいせいか下から見るとはなはだ小さい。鉄の格子がはまっているようだ。番兵が石像のごとく突立ちながら腹の中で情婦とふざけている傍らに、余は眉を攢め手をかざしてこの高窓を見上げて佇ずむ。格子を洩れて古代の色硝子に微かなる日影がさし込んできらきらと反射する。や

がて煙のごとき幕が開いて空想の舞台がありありと見える。窓の内側は厚き戸帳が垂れて昼もほの暗い。窓に対する壁は漆喰も塗らぬ丸裸の石で隣りの室とは世界滅却の日に至るまで動かぬ仕切りが設けられている。ただその真中の六畳ばかりの場所は冴えぬ色のタペストリで蔽われている。地は納戸色、模様は薄き黄で、裸体の女神の像と、像の周囲に一面に染め抜いた唐草である。石壁の横には、大きな寝台が横わる。厚樫の心も透れと深く刻みつけたる葡萄と、葡萄の蔓と葡萄の葉が手足の触る場所だけ光りを射返す。この寝台の端に二人の小児が見えて来た。一人は十三四、一人は十歳くらいと思われる。幼なき方は床に腰をかけて、寝台の柱に半ば身を倚たせ、力なき両足をぶらりと下げている。右の肱を、傾けたる顔と共に前に出して年嵩なる人の肩に懸ける。年上なるは幼なき人の膝の上に金に

て飾れる大きな書物を開ひらけて、そのあけてある頁ページの上に右の手を置く。象牙ぞうげを揉もんで柔やわらかにしたるごとく美しい手である。二人とも鳥の翼からすを敷あさむくほどの黒くろき上衣うわぎを着ているが色が極めて白いので一段と目立つ。髪の色、眼の色、さては眉根鼻付まゆねはなつきから衣装いしやうの末に至るまで兩人ふたり共ほとんど同じように見えるのは兄弟だからであらう。

兄が優しく清らかな声で膝の上なる書物を読む。

「我が眼の前に、わが死ぬべき折おとの想おもい見る人こそ幸さちあれ。日毎夜毎に死なんと願え。やがては神の前に行くなる吾の何を恐るる……」

弟は世に憐れなる声にて「アーメン」と云う。折から遠くより吹く木枯こがらしの高き塔を撼ゆるがして一度ひとたびは壁も落つるばかりにゴート鳴る。弟はひたと身を寄せて兄の肩に顔をすりつける。雪の

ごとく白い蒲団ふとんの一部がほかと膨れ返るふくかえ。兄はまた読み初める。「朝ならば夜の前に死ぬと思え。夜ならば翌日あすありと頼むな。覚悟をこそ尊べとうと。見苦しき死に様ぞ恥やまの極みなる……」

弟また「アーメン」と云う。その声は顫えてふるいる。兄は静かに書をふせて、かの小さき窓の方かたへ歩みよりて外の面を見ようとす。窓が高く背が足りぬせ。床几しょうぎを持つて来てその上につまだつ。百里をつつむ黒霧こくむの奥にぼんやりと冬の日が写る。屠ほぶれる犬の生血いきちにて染め抜いたようである。兄は「今日きょうもまたこうして暮れるのか」と弟を顧かえりみる。弟はただ「寒い」と答える。「命いのちさえ助けてくるるなら伯父様に王の位を進ぜるものを」と兄が独り言ひとごとのようにつぶやく。弟は「母はは様に逢あいたい」とのみ云う。この時向うに掛っているタペストリに織り出してある女神めがみの裸体像が風もないのに二三度ふわりふわりと動く。



こつぜん  
忽然舞台が廻る。見ると塔門の前に一人の女が黒い喪服を着  
て悄然しやうぜんとして立っている。面影おもかげは青白く窶やつれてはいるが、どこ  
となく品格のよい気高けだかい婦人である。やがて錠じやうのきしる音がし  
てぎいと扉あが開くと内から一人の男が出て来て恭うやうやしく婦人の前  
に礼をする。

「逢う事を許されてか」と女が問う。

いな  
「否」と気の毒そうに男が答える。「逢わせまつらんと思えど、  
おきて  
公おきてけの掟あきらなればぜひなしと諦あきらめたまえ。私わたくしの情なさけ売なるは安まき間の  
事ことにてあれど」と急に口を緘つぶみてあたりを見渡す。濠ほりの内から  
かい、つぶりがひよいと浮き上る。

うなじ  
女は頸うなじに懸けたる金きんの鎖くさりを解いて男に与えて「ただ束つかの間まを  
かいま  
垣間見かいまんと願ねがひなり。女にょにん人の頼たのみ引き受けぬ君はつれなし」と  
云う。

男は鎖りを指の先に巻きつけて思案の体である。かいつぶり、はふいと沈む。ややありていう「牢守りは牢の掟を破りがたし。御子らは変る事なく、すこやかに月日を過ぎさせたもう。心安く覚して帰りましたまえ」と金の鎖りを押戻す。女は身動きもせぬ。鎖ばかりは敷石の上に落ちて鏘然と鳴る。

「いかにしても逢う事は叶わずや」と女が尋ねる。

「御気の毒なれど」と牢守が云い放つ。

「黒き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」と云いながら女はさめざめと泣く。

舞台がまた変る。

丈の高い黒装束の影が一つ中庭の隅にあらわれる。苔寒き石壁の中からスーと抜け出たように思われた。夜と霧との境に立つて朦朧とあたりを見廻す。しばらくすると同じ黒装束の影がま

た一つ陰の底から湧いて出る。櫓の角に高くかかる星影を仰いで「日は暮れた」と背の高いのが云う。「昼の世界に顔は出せぬ」と一人が答える。「人殺しも多くしたが今日ほど寢覚の悪い事はまたとあるまい」と高き影が低い方を向く。「タペストリの裏で二人の話しを立ち聞きした時は、いつその事止めて帰ろうかと思うた」と低いのが正直に云う。「絞める時、花のような唇がぴりぴりと顫うた」「透き通るような額に紫色の筋が出た」「あの唸った声がまだ耳に付いている」。黒い影が再び黒い夜の中に吸い込まれる時櫓の上で時計の音ががあと鳴る。

空想は時計の音と共に破れる。石像のごとく立っていた番兵は銃を肩にしてコトリコトリと敷石の上を歩いている。あるきながら一件と手を組んで散歩する時を夢みている。

血塔の下を抜けて向へ出ると奇麗な広場がある。その真中が

少し高い。その高い所に白塔がある。白塔は塔中のもつとも古きもので昔むかしの天主である。豎たて二十間、横十八間、高さ十五間、壁の厚さ一丈五尺、四方に角楼すみやぐらが聳そびえて所々にはノーマン時代の銃眼じゅうがんさえ見える。千三百九十九年国民が三十三カ条の非を挙げてリチャード二世に讓位じょういをせまつたのはこの塔中である。僧侶、貴族、武士、法士の前に立つて彼が天下に向つて讓位を宣告したのはこの塔中である。その時讓りを受けたるヘンリーは起たつて十字を額と胸に画して云う「父と子と聖靈の名によつて、我れヘンリーはこの大英国の王冠と御代とを、わが正しき血、恵みある神、親愛なる友の援たすけを藉かりて襲つぎ受く」と。さて先王の運命は何人なんびとも知る者がなかつた。その死骸がポント・フラクト城より移されて聖セントポール寺に着した時、二万の群集は彼の屍しかばねを繞めぐつてその骨立こつりつせる面影おもかげに驚かされた。あるいは云う、八人

の刺客せつかくがリチャードを取り巻いた時彼は一人の手より斧おのを奪いて一人を斬きり二人を倒した。されどもエクストンが背後より下せる一撃のためについに恨うらみを呑のんで死なれたと。ある者は天を仰あおいで云う「あらずあらず。リチャードは断食だんじきをして自らみずかと、命の根をたたれたのじゃ」と。いずれにしてもありがたくない。帝王の歴史は悲惨の歴史である。

階下の一室は昔しオルター・ロリーゆうしゆうが幽囚ばんこくしの際万国史そうの草を記した所だと云い伝えられている。彼がエリザ式の半ズボンに絹の靴下ひざがしらを膝頭ひざがしらで結んだ右足を左ひだりの上へ乗せて鷲がペンの先さきを紙の上へ突いたまま首を少し傾けて考えているところを想像して見た。しかしその部屋は見る事が出来なかつた。

南側から入って螺旋状らせんじようの階段を上のぼるとここに有名な武器陳列場がある。時々手を入れるものと見えて皆びかびか光っている。

日本におつたとき歴史や小説で御目にかかるだけでいつこう要領を得なかつたものが一々明瞭になるのははなはだ嬉しい。しかし嬉しいのは一時の事で今ではまるで忘れてしまつたからやはり同じ事だ。ただなお記憶に残っているのが甲冑かつちゆうである。その中でも実に立派だと思つたのはたしかヘンリー六世の着用したものと覚えている。全体が鋼鉄製で所々に象嵌ぞうがんがある。もつとも驚くのはその偉大な事である。かかる甲冑を着けたものは少なくとも身の丈たけ七尺くらいの大男でなくてはならぬ。余が感服してこの甲冑を眺ながめているとコトリコトリと足音がして余の傍そばへ歩いて来るものがある。振り向いて見るとビーフ・イーターである。ビーフ・イーターと云うと始終牛ぎゆうでも食つている人のように思われるがそんなものではない。彼は倫敦塔の番人である。シルクハットシルクハットをつぶつぶ絹帽を潰したような帽子を被かぶつて美術学校の生徒のような服を

纏まとうている。太い袖そでの先を括くくつて腰のところを帯でしめている。服にも模様がある。模様は蝦夷人えぞじんの着る半纏はんてんについているようなすこぶる単純の直線を並べて角形かくがたに組み合わせたものに過ぎぬ。彼は時として槍やりをさえ携たずさえる事がある。穂の短かい柄えの先さきに毛の下がった三国志さんごくしにでも出そうな槍をもつ。そのビーフ・イーターの一人が余の後ろうしに止まった。彼はあまり背せの高くない、肥ふとり肉じしの白髯しろひげの多いビーフ・イーターであつた。「あなたは日本人ではありませんか」と微笑しながら尋ねる。余は現今の英国人と話をしてゐる気がしない。彼が三四百年の昔いにしへからちよつと顔を出したかまたは余が急に三四百年の古いにしへえを覗のぞいたような感じがする。余は黙もくして軽かろくうなずく。こちらへ来たまえと云うから尾ついて行く。彼は指をもつて日本製の古くき具足ぐそくを指して、見たかと云わぬばかりの眼つきをする。余はまただまつてうな

ずく。これは蒙古よりチャーレス二世に献上になつたものだと  
ビーフ・イーターが説明をしてくれる。余は三たびうなずく。

白塔を出てボーシヤン塔に行く。途中に分捕の大砲が並べて  
ある。その前の所が少しばかり鉄柵に囲い込んで、鎖の一部に  
札が下がっている。見ると仕置場の跡とある。二年も三年も長  
いのは十年も日の通わぬ地下の暗室に押し込められたものが、  
ある日突然地上に引き出さるるかと思うと地下よりもなお恐し  
きこの場所へただ据えらるるためであつた。久しぶりに青天を  
見て、やれ嬉しやと思うまもなく、目がくらんで物の色さえ定  
かには眸中に写らぬ先に、白き斧の刃がひらりと三尺の空を切  
る。流れる血は生きているうちからすでに冷めたかつたであろ  
う。鳥が一疋下りている。翼をすくめて黒い嘴をとがらせて人  
を見る。百年碧血の恨が凝つて化鳥の姿となつて長くこの不吉



な地を守るような心地がする。吹く風に楡にれの木がざわざわと動く。見ると枝の上にも鳥がいる。しばらくするとまた一羽飛んでくる。どこから来たか分らぬ。傍そばに七つばかりの男の子を連れた若い女が立つて鳥を眺ながめている。希臘風ギリシヤふうの鼻と、珠たまを溶といたようにうるわしい目と、真白な頸筋くびすじを形づくる曲線のうねりとが少からず余の心を動かした。小供は女を見上げて「鴉からすが、鴉からすが」と珍らしそうに云う。それから「鴉が寒さむそうだから、麵麩パンをやりたい」とねだる。女は静かに「あの鴉は何にもたべたがっついていやしません」と云う。小供は「なぜ」と聞く。女は長い睫まつげの奥に漾ただようているような眼で鴉を見詰めながら「あの鴉は五羽います」といったぎり小供の間には答えない。何か独ひとりで考えているかと思わるくらい澄すましている。余はこの女とこの鴉の間に何か不思議の因縁いんねんでもありはせぬかと疑った。彼は

鴉の気分をわが事のごとくに云い、三羽しか見えぬ鴉を五羽いと断言する。あやしき女を見捨てて余は独りボーシヤン塔に入る。

倫敦塔の歴史はボーシヤン塔の歴史であつて、ボーシヤン塔の歴史は悲酸ひさんの歴史である。十四世紀の後半にエドワード三世の建立こんりゆうにかかるこの三層塔の一階室に入るものはその入るの瞬間において、百代の遺恨いこんを結晶したる無数の紀念きねんを周囲の壁上に認むるであろう。すべての怨うらみ、すべての憤いきどおり、すべての憂うれいと悲かなしみとはこの怨えん、この憤、この憂と悲の極端より生ずる慰藉いしやと共に九十一種の題辞となつて今になお観みる者の心を寒からしめてゐる。冷やかなる鉄筆に無情の壁を彫つてわが不運じょううんと定業じやうごうとを天地の間に刻きざみつけたる人は、過去という底なし穴に葬られて、空もんじしき文字のみいつまでも娑婆しやばの光りを見る。彼らは強いて自みずか

らを愚弄ぐろうするにあらずやと怪あやしまれる。世に反語はんごというがある。白しろというて黒を意味し、小しょうと唱となえて大を思わしむ。すべての反語のうち自らみづか知らずして後世に残す反語ほど猛烈なるはまたとあるまい。墓碣ぼけつと云い、紀念碑しんねんひと云い、賞牌しょうはいと云い、綬賞じゆしょうと云いこれらが存在する限りは、空むなしき物質に、ありし世を偲しのばしむるの具となるに過ぎない。われは去る、われを伝うるものは残ると思うは、去るわれを傷いたましむる媒介物ばいかいぶつの残る意にて、われその者の残る意にあらざるを忘れたる人の言葉と思う。未来の世まで反語を伝えて泡沫ほうまつの身を嘲あざける人のなす事と思う。余は死ぬ時に辞世も作るまい。死んだ後は墓碑ぼひも建ててもらふまい。肉は焼き骨は粉こにして西風の強く吹く日大空に向つて撒まき散らしてもらおうなどといらざる取越苦勞をする。

題辞の書体は固もとより一様でない。あるものは閑ひまに任せて叮嚀ていねい

な楷書かいしよを用い、あるものは心急ぎてか口惜くやし紛れまぎかがりがりとして壁を搔かいて擲なぐり書きがきに彫りつけてある。またあるものは自家の紋章きぎを刻み込んでその中に古雅こがな文字をとどめ、あるいは盾たての形を描えがいてその内部に読み難き句を残している。書体の異ことなるように言語もまた決して一樣でない。英語はもちろんの事、以太利語イタリーゴも羅甸語ラテンゴもある。左り側に「我が望は基督キリストにあり」と刻されたのはパスリユという坊様ぼうさまの句だ。このパスリユは千五百三十七年に首を斬きられた。その傍かたわらに JOHAN DECKER と云う署名がある。デッカーとは何者だか分らない。階段のぼを上つて行くと戸の入口に H. O. というのがある。これも頭文字かしらもじだけで誰けんとうやら見当がつかぬ。それから少し離れて大變綿密めんみつなのがある。まず右の端はじに十字架を描いて心臓を飾りつけ、その脇がいこつに骸骨がいこつと紋章を彫り込んである。少し行くと盾たての中に下しものような句をかき入れた

のが目につく。「運命は空しく我をして心なき風に訴えしむ。時  
も摧くだけよ。わが星は悲かれ、われにつれなかれ」。次には「すべ  
ての人を尊とうとべ。衆生をいつくしめ。神を恐れよ。王を敬うやまえ」と  
ある。

こんなものを書く人の心の中はどのようであつたらうと想像  
して見る。およそ世の中に何が苦しいと云つて所在のないほど  
の苦しみはない。意識の内容に変化のないほどの苦しみはない。  
使える身体からだは目に見えぬ縄で縛しばられて動きのとれぬほどの苦し  
みはない。生きるというは活動しているという事であるに、生  
きながらこの活動を抑えられるのは生という意味を奪われたる  
と同じ事で、その奪われたを自覚するだけが死よりも一層の苦  
痛である。この壁の周囲をかくまでに塗抹とまつした人々は皆この死  
よりも辛つらい苦痛を嘗なめたのである。忍しのぶる限り堪たえらるる限

りはこの苦痛と戦つた末、いても起つてもたまらなくなつた時、始めて釘くぎの折おれや鋭とぎどき爪つめを利用して無事の内に仕事を求め、太平うちの裏うらに不平ふへいを洩もらし、平地へいの上に波瀾なみを画えいたものであろう。彼らが題だいせる一字一画いちじついちくわは、号泣ごうきゅう、涕淚ていらい、その他すべて自然の許す限りの排悶はいもん的手段てんを尽つしたる後のちなお飽あく事を知らざる本能の要求に余儀なくせられたる結果であらう。

また想像して見る。生れて来た以上は、生きねばならぬ。あえて死を怖るるとは云わず、ただ生きねばならぬ。生きねばならぬと云うは耶蘇ヤソウ孔子こうし以前の道で、また耶蘇孔子以後の道である。何の理窟りくつも入らぬ、ただ生きたいから生きねばならぬのである。すべての人は生きねばならぬ。この獄つなに繋つながれたる人もまたこの大道に従つて生きねばならなかつた。同時に彼らは死ぬべき運命を眼前ひかに控えておつた。いかにせば生き延びらるる

だらうかとは時々刻々彼らの胸裏きょうりに起る疑問であつた。ひとた  
びこの室へやに入るものは必ず死ぬ。生きて天日を再び見たものは  
千人ひとりに一人しかない。彼らは遅かれ早かれ死なねばならぬ。さ  
れど古今わたに亘る大真理は彼らに誨おしえて生きよと云う、飽あくまでも  
生きよと云う。彼らはやむをえず彼らの爪を磨といだ。尖とがれる  
爪の先をもつて堅き壁の上のちに一と書いた。一をかける後のちも真理  
は古いにしへえのごとく生きよと囁ささやく、飽くまでも生きよと囁く。彼ら  
は剥はがれたる爪の癒いゆるを待つて再び二とかいた。斧おのの刃はに肉  
飛び骨くだ摧ける明日あすを予期した彼らは冷やかなる壁の上にただ一  
となり二となり線となり字となつて生きんと願つた。壁の上に  
残る横縦よこたての疵きずは生せいを欲する執着しゅうじやくの魂魄こんぱくである。余が想像の糸を  
ここまでたぐつて来た時、室内の冷氣が一度に背せの毛穴から身  
の内に吹き込むような感じがして覚えおぼえずぞつとした。そう思つ

て見ると何だか壁が湿しめつぽい。指先で撫なでて見るとぬらりと露にすべる。指先を見ると真赤まっかだ。壁の隅すみからぼたりぼたりと露の珠たまが垂れる。床ゆかの上を見るとその滴したたりの痕あとが鮮やかな紅くれないの紋もんを不規則に連つらねる。十六世紀の血がにじみ出したと思う。壁の奥の方から唸うなり声さえ聞える。唸り声がだんだんと近くなる。それが夜を洩もるる凄すこい歌と変化する。ここは地面の下に通ずる穴倉でその内には人が二人ふたりいる。鬼の国から吹き上げる風が石の壁の破れ目めを通すつて小やかなカンテラを煽あおるからたださえ暗へやい室むろの天井も四隅よすみも煤色すすいろの油煙ゆえんで渦巻うずまいて動うごいているように見える。幽かすかに聞えた歌の音は窖中こうちゆうにいる一人の声に相違ない。歌の主ぬしは腕を高くまくつて、大きな斧おのを轆轤ろくろの砥石といしにかけて一生懸命ちかまに磨といでいる。その傍そばには一挺ちようの斧が抛なげ出してあるが、風の具合でその白い刃はがぴかりぴかりと光る事がある。他の一



人は腕組をしたまま立つて砥の転るのを見ている。髯の中から顔が出ていてその半面をカンテラが照らす。照らされた部分が泥だらけの人参にんじんのような色に見える。「こう毎日のように舟から送って来ては、首斬り役も繁昌はんじょうだのう」と髯がいう。「そうさ、斧を磨ぐだけでも骨が折れるわ」と歌の主ぬしが答える。これは背の低い眼の凹くぼんだ煤色すすいろの男である。「昨日は美しいのをやったなあ」と髯が惜しそうにいう。「いや顔は美しいが頸くびの骨は馬鹿に堅い女だった。御蔭でこの通り刃が一分ばかりかけた」とやけに轆轤ころを転ばす、シュシュシュと鳴る間あいだから火花がピチピチと出る。磨ぎ手は声を張り揚げて歌い出す。

切れぬはずだよ女の頸くびは恋の恨みうらみで刃が折れる。

シュシュシュと鳴る音のほかには聴えるものもない。カンテラの光りが風に煽あおられて磨ぎ手の右の頬ほを射る。煤すすの上に朱を流

したようだ。「あすは誰の番かな」とややありて髯が質問する。  
「あすは例の婆様の番さ」と平気に答える。

生える白髪を浮気が染める、骨を斬られりや血が染める。

と高調子に歌う。シュシュシュと轆轤が回わる、ピチピチと火花が出る。「アハハハもう善かろう」と斧を振り翳して灯影に刃を見る。「婆様ぎりか、ほかに誰もいないか」と髯がまた問をかける。「それから例のがやられる」「気の毒な、もうやるか、可愛相にのう」といえば、「気の毒じやが仕方がないわ」と真黒な天井を見て嘯く。

たちまち窖も首斬りもカンテラも一度に消えて余はボーシヤン塔の真中に茫然と佇んでいる。ふと気がついて見ると傍に先刻からす鴉に麵麩をやりたいと云った男の子が立っている。例の怪しい女もものごとくついている。男の子が壁を見て「あそこに犬が

かいてある」と驚いたように云う。女は例のごとく過去の権化ごんげと云うべきほどの屹ぎつとした口調くちようで「犬ではありません。左りが熊、右が獅子ししでこれはダッドレー家の紋章けです」と答える。実のところ余も犬か豚だと思つていたのであるから、今この女の説明を聞いてますます不思議な女だと思ふ。そう云えば今ダッドレーと云つたときその言葉の内に何となく力が籠こもつて、あたかも己おのれの家名でも名乗なのつたごとくに感ぜらるる。余は息を凝こらして両人ふたりを注視する。女はなお説明をつづける。「この紋章きざを刻んだ人はジョン・ダッドレーです」あたかもジョンは自分の兄弟のごとき語調である。「ジョンには四人の兄弟があつて、その兄弟が、熊と獅子の周囲まわりに刻みつけられてある草花でちやんと分ります」見るとなるほど四通りよとの花だか葉だかが油絵の枠わくのように熊と獅子を取り巻いて彫ほつてある。「ここにあるのは

Acorns ではなくは Ambrose の事です。こちらにあるのが Rose で Robert を代表するのです。下の方に忍冬にんどうが描かいてありましよう。忍冬は Honeysuckle だから Henry に当るのです。左りの上に塊かたまりっているのが Geranium ではなくは G……」と云ったぎり黙っている。見ると珊瑚さんごのような唇くちびるが電気でも懸かけたかと思われるまでにふるふると顫ふるえている。蝮まむしが鼠ねずみに向ったときの舌の先のごとくだ。しばらくすると女はこの紋章の下に書きつけてある題辞ほがを朗ほがらかに誦じゆした。

Yow that the beasts do wel behold and se,

May deme with ease wherefore here made they be

Withe borders wherein ……………

4 brothers' names who list to serche the ground.

女はこの句を生れてから今日きょうまで毎日日課にっかとして暗誦あんじようしたよう

に一種の口調をもつて誦じゆし了おわつた。実を云うと壁にある字ははなはだ見みに悪い。余のごときものは首を捻ひねつても一字も読めそうにない。余はますますこの女を怪しく思う。

気味が悪くなつたから通り過ぎて先へ抜ける。銃眼じゆうがんのある角を出ると滅茶苦茶めちやくちやに書き綴つづられた、模様だか文字だか分らない中に、正しき画かくで、小くちいさ「ジェーン」と書いてある。余は覚えずその前に立留まつた。英国の歴史を読んだものでジェーン・グレーの名を知らぬ者はあるまい。またその薄命と無残の最後に同情の涙を濺そそがぬ者はあるまい。ジェーンは義父ぎふと所天おつとの野心のために十八年の春秋しゆんじゆうを罪なくして惜気おしげもなく刑場に売つた。蹂ふみ躪にじられたる薔薇ばらの蕊しべより消え難き香かの遠く立ちて、今に至るまで史ひもとを繙ひもとく者をゆかしがらせる。希臘語ギリシヤゴを解しプレートーを讀んで一代の碩学せきがくアスカムをして舌を捲まかしめたる逸事せきじは、

この詩趣ある人物を想見するの好材料として何人の脳裏にも保存せらるるであらう。余はジェーンの名の前に立留つたぎり動かない。動かないと云うよりむしろ動けない。空想の幕はすであいてゐる。

始は両方の眼が霞んで物が見えなくなる。やがて暗い中の一点にパツと火が点ぜられる。その火が次第次第に大きくなつて内に人が動いてゐるような心持ちがする。次にそれがだんだん明るくなつてちようど双眼鏡の度を合せるように判然と眼に映じて来る。次にその景色がだんだん大きくなつて遠方から近づいて来る。気がついて見ると真中に若い女が坐つてゐる、右の端には男が立つてゐるようだ。両方共どこかで見たようだなと考えるうち、瞬たくまにズツと近づいて余から五六間先ではたと停る。男は前に穴倉の裏で歌をうたつていた、眼の凹んだ煤色をし

た、背せの低い奴だ。磨とぎすました斧おのを左手ゆんでに突ついて腰こしに八寸ほどの短刀をぶら下げて身構みまかえて立たつてゐる。余は覚えおぼえずギョツとする。女は白しろき手巾ハンケチで目隠めかくししをして両りやうの手で首くびを載のせる台たいを探たづなすような風情ふうせいに見える。首くびを載のせる台たいは日本の薪割まきわり台たいぐらいの大きおほきさで前に鉄てつの環わんが着きいてゐる。台たいの前部ぜんぶに藁わらが散ちらしてあるのは流ながれる血ちを防まぐ要慎ようじんと見みえた。背後せたいの壁かべにもたれて二三人の女おんなが泣なき崩くずれてゐる、侍女じよじよでもあろうか。白しろい毛裏けうらを折ひり返かへした法衣ほうえを裾すそ長ながく引ひく坊ぼうさんが、ううつ向むいて女おんなの手てを台たいの方角ほうかくへ導みちいてやる。女おんなは雪ゆきのごごとく白しろい服ふくを着きけて、肩かたにあまる金色こんじきの髪かみを時々ときとき雲うみのようように揺ゆらす。ふとその顔かほを見みると驚おどいた。眼まなここそ見みえね、眉まゆの形かたち、細こまき面おもて、ななよよかかなる頸くびの辺あたりに至いたるまで、先刻さつき見みた女おんなそのまままである。思おもわず馳かけ寄よろうとししたが足あしが縮ちぢんで一歩いちぽも前まへへ出でる事ことが出来できぬ。女おんなはようやく首斬くびざ

り台を探り当てて両の手をかける。唇がむずむずと動く。最前さいぜん男の子にダッドレーの紋章を説明した時と寸分違わぬ。すんぶんたがやがて首を少し傾けて「わが夫おつとギルドフオード・ダッドレーはすでに神の国に行つてか」と聞く。肩を揺り越した一握りの髪が軽くかろうねりを打つ。坊さんは「知り申さぬ」と答えて「まだ真まことの道に入りたもう心はなきか」と問う。女屹きつとして「まこととは吾おつとと吾夫の信ずる道をこそ言え。御身達の道は迷いの道、誤りの道よ」と返す。坊さんは何にも言わずにいる。女はやや落ちついた調子で「吾夫が先なら追いつこう、後あとならば誘さそうて行こう。正しき神の国に、正しき道を踏んで行こう」と云い終つて落つるがごとく首を台の上に投げかける。眼の凹くぼんだ、煤色すすいろの、背の低い首斬り役が重た気げに斧をエイと取り直す。余の洋袴ズボンの膝に二三点の血が迸ほとばしると思つたら、すべての光景が忽然こつぜんと消



え失うせた。

あたりを見廻わすと男の子を連れた女はどこへ行つたか影さえ見えない。狐こに化ばかされたような顔をして茫然ぼうぜんと塔を出る。帰り道にまた鐘塔しゆとうの下を通つたら高い窓からガイフオークスが稲妻いなずまのような顔をちよつと出した。「今一時間早かつたら……。この三本のマツチが役に立たなかつたのは実に残念である」と云う声さえ聞えた。自分ながら少々気が変だと思つてそこそこに塔を出る。塔橋を渡つて後ろうしを顧かえりみたら、北の国の例かこの日もいつのまにやら雨となつていた。糠粒ぬかつぶを針の目からこぼすような細かいのが満都まんとの紅塵こうじんと煤煙ばいえんを溶とかして濛々もうもうと天地を鎖とぎす裏うちに地獄の影のようにぬつと見上げられたのは倫敦塔であつた。

無我夢中に宿に着いて、主人に今日は塔を見物して来たと話

したら、主人が鴉からすが五羽いたでしようと言う。おやこの主人もあの女の親類かなと内心大おおに驚ろくと主人は笑いながら「あれは奉納の鴉です。昔しからあすこに飼っているので、一羽でも数が不足すると、すぐあとをこしらえます、それだからあの鴉はいつでも五羽に限っています」と手もなく説明するので、余の空想の一半は倫敦塔を見たその日のうちに打ち壊ぶわされてしまった。余はまた主人に壁の題辞むざうさの事を話すと、主人は無造作むざうさに「ええあの落書らくがきですか、つまらない事をしたもんで、せつかく奇麗な所を台なしにしてしまいましたねえ、なに罪人ざいにんの落書だなんて当あてになつたもんじゃありません、贖にせもだいぶありませんからね」と澄すましたものである。余は最後に美しい婦人に逢あつた事とその婦人が我々の知らない事やとうてい読めない字句をすらすら読んだ事などを不思議そうに話し出すと、主人は大に軽蔑けいべつ

した口調で「そりや当り前でさあ、皆んなあすこへ行く時にや案内記を読んで出掛けるんでさあ、そのくらいの事を知つてたつて何も驚くにやあたらないでしょう、何すこぶる別嬪だつて？——倫敦にやだいぶ別嬪がいますよ、少し気をつけないと險呑ですぜ」ととんだ所へ火の手が揚る。これで余の空想の後半がまた打ち壊わされた。主人は二十世紀の倫敦人である。それからは人と倫敦塔の話をしなない事にきめた。また再び見物に行かない事にきめた。

この篇は事実らしく書き流してあるが、実のところ過半想像的の文字であるから、見る人はその心で読まれん事を希望する、塔の歴史に関して時々戯曲的に面白そうな事柄を撰んで綴り込んで見たが、甘く行かんのので所々不自然の痕迹が見えるのはやむをえない。そのうちエリザベス（エドワード四

世の妃)が幽閉中の二王子に逢いに來る場と、二王子を殺した刺客せつかくの述懐じゆつかいの場は沙翁さおうの歴史劇リチャード三世のうちにもある。沙翁はクラレンス公爵の塔中で殺さるる場を写すには正筆せいひつを用い、王子を絞殺こうさつする模様をあらわすには仄筆そくひつを使つて、刺客の語を藉かり裏面からその様子を描出びやうしゆつしている。かつてこの劇を読んだとき、そこを大おおに面白く感じた事があるから、今その趣向をそのまま用いて見た。しかし對話の内容周囲の光景等は無論余の空想から捏出ねつしゆつしたもので沙翁とは何らの関係もない。それから断頭吏だんとうりの歌をうたつて斧おのを磨とぐところについて一言いちげんしておくが、この趣向は全くエーンズウォースの「倫敦塔ロンドンとう」と云う小説から來たもので、余はこれに対し些少さしやうの創意をも要求する権利はない。エーンズウォースには斧おのの刃のこぼれたのをソルスベリ伯爵夫人を斬る時の出來

事のように叙してある。余がこの書を読んだとき断頭場に用うる斧の刃のこぼれたのを首斬り役が磨といでいる景色などはわずかに一二頁に足らぬところではあるが非常に面白いと感じた。のみならず磨とぎながら乱暴な歌を平気でうたっていると云う事が、同じく十五六分の所作ではあるが、全篇を活動せしむるに足たるほどの戯曲的出来事だと深く興味を覚えたので、今その趣向そのままを踏襲とつしゅうしたのである。但し歌の意味も文句も、二吏の対話も、暗窖あんこうの光景もいっさい趣向以外の事は余の空想から成つたものである。ついでだからエーンズウォースが獄門役に歌わせた歌を紹介して置く。

The axe was sharp, and heavy as lead,

As it touched the neck, off went the head!

Whir—whir—whir—whir!

Queen Anne laid her white throat upon the block,  
Quietly waiting the fatal shock;  
The axe it severed it right in twain,  
And so quick—so true—that she felt no pain.

Whir—whir—whir—whir!  
Salisbury's countess, she would not die  
As a proud dame should—decorously.

Lifting my axe, I split her skull,  
And the edge since then has been notched and dull.

Whir—whir—whir—whir!  
Queen Catherine Howard gave me a fee, —  
A chain of gold—to die easily:  
And her costly present she did not rue,

For I touched her head, and away it flew!

Whir—whir—whir—whir!

この全章を訳そうと思つたがとうてい思うように行かないし、かつ余り長過ぎる恐れがあるからやめにした。

二王子幽閉の場と、ジェーン所刑の場については有名なドラロツシの絵画がすくなくならず余の想像を助けている事を一言していささか感謝の意を表する。

舟より上る囚人のうちワイアットとあるは有名なる詩人の子にてジェーンのため兵を挙げたる人、父子同名なる故紛れ易いから記して置く。

塔中四辺の風致景物を今少し精細に写す方が読者に塔その物を紹介してその地を踏ましむる思いを自然に引き起させる上において必要な条件とは気がついてゐるが、何

分かかる文を草する目的で遊覧した訳ではないし、かつ年月が経過しているから判然たる景色がどうしても眼前にあらわれにくい。したがってややともすると主観的の句が重複ちようふうふくして、ある時は読者に不愉快な感じを与えはせぬかと思うところもあるが右の次第だから仕方がない。

(三十七年十二月二十日)



倫敦塔

底本：「夏目漱石全集 2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 10 月 27 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

入力：柴田卓治

校正：LUNA CAT

2000 年 8 月 31 日公開

2004 年 2 月 28 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。